

「日本3.0」

Vol.11

リーダーにはなぜアートが必要なのか

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

最近、若いリーダーの間で、アートが流行り始めています。今年5月、ZOTOWNの前澤友作氏がバスキア作品を123億円で落札したことが、世界的なニュースになりました。日本のリーダーにとって、アートが身近になっているのは、すばらしい潮流です。アートが生活に入り込んでいくかどうかで人生の質、リーダーシップの質が変わってきます。たとえばチャーチルは40歳の頃から、絵を描くことを始めました。彼は「私

が最も苦しい時に、絵を描くことが救いの手を差し延べてくれた」と振り返っています。

チャーチルは死ぬまで絵を描き続け、毎年、ロイヤルアカデミーに入選するレベルにまで腕を上げました。ノーベル文学賞を受賞するほどの文才をもったチャーチルは、絵画をこよなく愛する超一級の教養人だったのです。

私が、アートという点で、感銘を受けたリーダーが石川康晴さんです。

石川さんは、「アースミュージック&エコロジー」などの人気ブランドを有するストライプインターナショナルの創業者にして、当代きっての現代アートコレクターとしても知られています。昨年には、地元岡山で現代アートの大型国際展をプロデュースしました。

石川さんに「アートとビジネスにはつながりがありますか」と聞いたところ、「現代アートのアーティストと交流することで、ビジネスのアイデアまで浮かんでくる」とのことでした。しかも、アートを通じて、ビジネス

シーンでは会わない人とも出会えるという喜びもあります。

現代でこそ、日本のビジネスパーソンの趣味はゴルフばかりになってしまいましたが、過去には芸術を深く愛するリーダーが多数いました。

書や漢詩をたしなんだ明治の志士たちはもちろん、戦前から戦後にかけても、文化人リーダーの系譜は続いていました。

「電力王」「電力の鬼」として知られる松永安左エ門(1875~1971)は、大茶人として知られ、仏教美術を取り入れた侘び茶の世界を追求しました。また、宝塚歌劇の創始者である小林一三(1873~1957)も大茶人として名を馳せました。大阪の池田市にある逸翁美術館には、小林の個人コレクション約5000点以上が収蔵されています。

財界人がアートを楽しみ、アートを通して社交する。こうした文化を「日本3.0」の時代には復興していかないとはいけません。



Profile

NewsPicks編集長

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。リニューアルから4カ月で同サイトをビジネス誌系サイトNo.1に導く。2014年7月から経済ニュースサイト「NewsPicks」の編集長を務める。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか?」がある。